

生涯学習 だより

第86号 <新春号>

2024年1月1日 発行

撮影場所：府中の森公園

写真提供：「悠学の会」映像グループ

* 第86号のテーマ *

2024年は 新しい挑戦を！

P.1

府中市文化スポーツ部文化生涯学習課
鈴木課長からのご挨拶

P.3

「学びを楽しむ・学びを支える」[16]
シニアの居場所づくり 漢人さん

P.2

2023年の府中市生涯学習フェスティバル
実行委員長／広報担当インタビュー

P.4

【ふちゅう東西南北】市境を超えて
国分寺市の学びのポイントを巡る

生涯学習の振興を図り、市民生活の充実に寄与するために

府中市文化スポーツ部文化生涯学習課長 鈴木正憲

生涯学習センターは、市民がより豊かな人生を送ることができるよう、誰もが学びたいときにいつでも学ぶことができる機会と環境を提供する市内唯一の総合学習施設として、平成5年に開館いたしました。

生涯学習センターでは、教養、生活実技などの講座やスポーツ、健康増進に関する講座などを実施しているほか、グループでの学習活動の場としてご利用いただくなど、本市の生涯学習を支える拠点施設として、大変多くの方にご利用いただいております。

そして、生涯学習センターを拠点としつつ、第3次府中市生涯学習推進計画に基づき、「みんなが学び地域に返す人と地域がともに育つ『学び返し』のまち 府中」



<浅間山から富士山を望む>

を目標に掲げ、「誰もが学べる環境づくり」「誰もが活躍できる環境づくり」「生涯学習を支える基盤の整備」の各施策を展開していますが、

本格的な「人生100年時代」を迎え、これからの生涯学習を支える公共の役割とは何かを考えながら、さらなる生涯学習行政の充実に取り組んでまいります。

今年一年が、皆様にとって幸多く、実り豊かな年となることを祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

表紙のつぶやき

コロナ禍で足踏みしていた好奇心を解き放って、新しいことに挑戦する時は今！

今年は半歩でも1歩でも前進しましょう。

コロナ禍の3年間は、出かけるのも憚られ、新しいことに取り掛かることもできずいた方が多いのではないのでしょうか。2024年は辰年（立つ年！）。私たちも立ち上がって、好奇心をよみがえらせませんか。

どんなことでもいいじゃないですか、大きなこと小さなこと、コロナで中断したこと諦めたこと、とにかく踏み出すことが肝心です。

さあ、あなたは何を始めますか？（西谷信昭）



マナビーの「教えてくださ〜い」 2023 生涯学習フェスティバルの様子は？

2023 生涯学習フェスティバル（SGF2023）は、10月8日（市民文化の日）、9日に開催されました。今年はファシリテータ養成講座修了者を中心に、シニアから大学生までの新しいメンバーが実行委員として新風を吹き込んでくれました。そこで、実行委員長の白澤昭雄さん（浅間町）、広報担当として大活躍された石橋雄司さん（押立町）にその体験談をお伺いしました。（取材：奥野英城、中濱敬文）

実行委員会に参加しようと思われたきっかけは？

白澤

ファシリテータ養成講座を受講した後に生涯学習センター（SGC）の“和みの部屋”にも参加していたこともあって、SGC の長田さんから声をかけられたことがきっかけです。委員長を引き受けたのは、講座受講生仲間で副委員長の下野さんから全面協力するからと推されたことが大きい要因ですね。

石橋

学習センターとのつながりは、娘を連れてプールを利用したり、時々図書館に来たりする程度でした。私は普段会社勤めをしており、それまで地域の行事にほとんど関わる機会がありませんでした。会社のことだけでなく、地域で企画するお互いに交流するイベントに参加することで、仕事で学んで来たことが、何か活かせるのかもしれないと思って、市民公募の実行委員に応募しました。



＜写真の前列中央が白澤さん 左が石橋さん＞

活動の中で工夫されてきたことは？

白澤

今までのことはあまりわかりませんが、私が思っていたのは、ボランティアとして参加している人自身が、なにかやらなければいけないとかの義務感ではなく、余裕をもってフェスティバルを楽しんでもらいたいなと意識してきました。特に、新しい試みやアイデアには、できるだけ実施できるように委員会の雰囲気づくりをするように心がけました。

石橋

これまで会社仕事でやっていた当たり前のことをきちんとやってみようと思いました。イベント企画や運営の経験もあったので、まず自分でやって形にすれば皆さんの意見が出て一緒に行動する流れができるよう、率先して楽しくやることを意識しました。

また広報での新しい試みとして、若い人がフェスティバルに関心を持ってくれるよう SNS での発信に力を入れました。インスタ映えを意識した撮影場所を設け、なるべく皆さんが SNS に発信してくれるように工夫しました。ただ企画したものをすべて反映できず、どこまで発信拡散できたかやや不明な点がありますが。

今後の方向・次回への提言は？

石橋

イベント企画ではよくあることですが、広報パンフを印刷する段階でもプログラムの詳細が決まっていなくて、スケジュールが逼迫したのには苦労しました。プログラムがもう少し早く参加団体に配布でき、そこに SNS での発信を加えることができていると、参加者も増えたのではないかと思います。

白澤

今年は、スケジュールの確定がおくれたことで、石橋さんはじめ広報担当者には忙しい思いをさせてしまいました。SGF は 市民の学習活動の発表の場と、体験学習の機会として定着しているので、次回は時間的に余裕を持った準備をすすめて、早い周知と宣伝をして一層盛り上げて欲しいと思います。

今回の実行委員会には 20 代から 70 代までの多様なメンバーが集まり、世代間の繋がりも生まれました。若いメンバーのアイデアで新しい試みがなされ、実行委員会は体験的学習の実践場所ということもできます。次回もチャレンジ精神に溢れた若い世代の委員が集まることを期待します。

★ここに掲載したインタビューは抜粋版です。完全版は「悠 WEB」にアップしています。
ご覧ください。悠 WEB: <http://yuugaku.tokyo/>





リタイアシニアの働ける場所づくりにチャレンジする

2022年ジャズ・イン・府中実行委員長 漢人邦夫さん(住吉町在住)

シニアがリタイアした後、どのように働く場所を持つかという課題に正面から挑戦し、みんなの役に立つ事業を立ち上げた漢人(かんど)さんに、その思いを聞いてみました。

一 ジャズ・イン・府中を長年支えてこられましたが

そうですね、高校生の時からギターを弾いて音楽には親しんでいました。それで、リタイア後、ジャズ・イン・府中の実行委員会に参加しました。もともと裏方が大好きで周りからは重宝がられ、会場責任者などを任されていました。2020年から3年間は委員長を引き受けることになりましたが、先の2年間はコロナ禍に見舞われ、2022年にやっと開催できたのです。

久しぶりということで資金を集めるのも一苦勞でしたが、パンフレットを工夫するなど経費を削減したりまあ大変でしたがやり遂げました。

やってみて思ったのですが、やはり運営には人が足りない。当日ボランティアは何とか集められましたが、実行委員会は昼間の活動が多いのでなかなか若い人が入ってこないんです。これはどこも同じようで、人手



不足・若手不足で解散する団体は多いようです。自治会でもそんなことがあるようです。

ジャズ・イン・府中は委員長を退くとともに卒業させてもらい、小さなバンド「アンサンブルシナップス」を始めました。ギターとオカリナ(2人)、マリンバの4人での新しい挑戦です。作曲も編曲も私がやりますが、本当に楽しんでいます。

一 今後は大きなチャレンジをされるとのことですが

今一番大きな関心を持っているのは、リタイアしたシニアの居場所・活躍場所をどうするかということなんです。

リタイアしたシニアは、私もそうでしたが、何かをしようと思えるものです。しかし、「旅行をしよう」「ゴルフ三昧がいい」などリタイア前に思い描いていたことはなかなかできず、実際には1週間が埋まらない。

そこで料理教室や蕎麦打ち体験などに通ってみるがなかなか時間が使えない。毎日図書館に行ってジムに行ったりなど、ぶらぶらするばかりで居場所がなかなか見つからないのが現実です。といって再就職しようと思っても、朝きちんと起きて満員電車に乗ってということではもうできない。

それで、シルバー人材センターを頼ってみる。でも満足できる仕事なかなか見つからない。リタイアシニアは企業で働いていた人が大半で、それなりにプライドがあって選り好みを言ってしまうがちです。では、どんな仕事がいいかという、孫に自慢ができるもので月2万円位の収入になるものです。2万円というのは、ちょっとした贅沢に、安心して使える金額なんです、これが良い。

私は、府中市の国際交流サロンで在府中市の外国人に日本語を教えるボランティアをやっていますが、ここにボランティアとして集う方は、喜々としてやっておられます。教えるというのはプライドを満たされることですし、外国人の学習者は若い人が多く、エネルギーをもらえる気がするんですね。だからやめる人は少ない。学習者のニーズも多いです。

「そうだ、これならリタイアシニアの仕事としても向いている。日本語のニュアンスをうまく教えるのも、経験豊富なシニアが得意とするところじゃないか」そう考えて、無理なく働けて、少しの収入が伴うシステムを作ってみようと思い、日本語指導をオンラインで行う「Mr.CANDOの日本語教室」を立ち上げました。

まだ緒に就いたばかりですが、1か月10人担当して日本語を指導すれば、2万円ほどの収入になる、そんなリタイアシニアの働き場



<https://www.mr-cando.com/>所を提供できるようになりました。今はまだ働き手は10人ほどですが、ホームページも立ち上げ徐々に増やしていこうと思っています。

幸い、シニアの問題と技能実習生の日本語習得の問題の両方の課題解決になりそうということで、国から補助金もいただきました。みなさんのお役に立ちたいという裏方大好きな私の、新たな挑戦として、ますます頑張っていこうと思っています。

一 なかなか若いメンバーが加入してこない組織の問題に何かアドバイスをお願いします

若者が入ってこないという問題ですけども、組織そのものの活動がワンパターンになっていることが多いんです。そこを少し直して若者が興味を持つ、若者が入ってくるような仕掛けをすることが大切です。そして、若者が協力してくれるようになったら、一度思い切って任せて口を出さないという姿勢が大切です。そうしないと、ここでは何をしても変わらないと思って去っていくことが多いのです。知らないうちに壁を作ってしまっているというのが実情で、そこをこころを考え直さないと若者は集められないと思います。

近い将来、3人に1人が65歳以上になるという時代においては、若者が参加する組織でないと、どんどんシニアの居場所がなくなっていって、大変なことになると思います。シニアの皆さんにも少し考えてほしいですね。(取材：山田詩子、西谷信昭)

ふちゅう東西南北

隣接市の“学びのスポット”巡り～未知を求めて

「新しい年には新しい発想で」と考え、市の境界線を越えて、隣接する市の学びに役立つ場所・スポットを巡ることにしました。府中市の南は多摩川でその向こうは稲城市、西に国立市、北は国分寺市、東には調布市など、7 つもの市に囲まれています。今回は北西のお隣・国分寺市へ。西国分寺駅から始まる散策コースを歩いてみました。



国分寺を訪ねて

西国分寺駅から都立図書館を通り過ぎると武蔵国分寺公園にたどり着きます。ここには大きな木がたくさんありヒマラヤスギ、ドイツトウヒ、センダンなど、木の実好きには嬉しい公園です。

(ヒマラヤスギの松ぼっくりは“バラの花”型)

この公園から崖線を



下ってお鷹の道沿いに歩いて行くと「国分寺」に突き当たります。府中育ちの私は、地名は知っていても国分寺というお寺があることは長い間知りませんでした。とても風情のあるお寺で、万葉植物園になっています。春の七草、秋の七草でも有名です。時間をかけじっくり回りたいと思いました。(井口文江)

都立多摩図書館

今回一番印象に残ったのは「都立多摩図書館」でした。JR 中央線 西国分寺からほど近くにあり、2017年に立川市から移転したようです。



立川から引き継がれた「東京マガジンバンク」(2009年創設)があります。19,000誌(外国雑誌含)所蔵され、最新1年分6,000誌が常時閲覧できます。なかなか圧倒される光景で、とても時間が足りません。

入口を入りすぐ目についたのは展示コーナー、壁には今回はザ・ビートルズのポスター、その時のテーマによる展示物が目を引きまします。なお奥に入ると、そのマガジンの眺めが。その内、手に取って見ることができたのは5誌、帰りぎわ左手を見てまたびっくり、音楽や女性誌、映画、鉄道等々、各誌の創刊号が並んでいます。創刊号コレクションだそうですが、懐かしいタレントが表紙を飾っていました。バックナンバーも見たくてきます。次回は1日時間を作って訪れたいと思いました。(渡邊繁雄)

秋の武蔵国分寺公園にて

11月というのに暖かな日の午前中、武蔵国分寺公園に行った。この公園は、多喜窪通りを挟んで南北に2地区がある。北側は前日の催事後片付けの最中だったので、私たちは南の方へ向かったが、そこにも大きな広場があり、廻りを囲むようにベンチが点在している。広場の中ほどには大きな柿の木が驚くほど沢山の実を付けていた。この木の傍のベンチに落ち着くと早速、持ち込んだ甲州産の新酒白ワインが開けられた。平日のこんな時間に誰にも気兼ねせずホロ酔い気分が気儘に会話を楽しんだ。なるほど、外に出る元気があって、仲間がいて、美酒少々(?)があれば、人生うまいくのでしょ。 (竹村 稔)



東山道武蔵路跡を歩く

JR 西国分寺駅南口を出て、住宅街を東に進むと、東山道武蔵路跡に出る。古代、日本に中央集権の律令制国家が誕生したとき、行政区分として五畿七道が置かれ、各国の国府へは道路網が整備された。

東山道は、奈良・京都から列島の中央部を通って奥州へ通じる官道で、武蔵国の国府が府中にあったので、東山道の支道として上野国新田(群馬県)から武蔵府中まで武蔵国を南北一直線に貫く武蔵路が作られた。近年、この路跡の発掘調査が行われ、



国分寺市は国指定史跡として整備、展示している。幅12m、両側に側溝がある道路の一部を見ることが出来る。中央部はへこんでおり、馬が走った跡

とおぼしき窪みが見えるのは興味深い。武蔵路跡の大部分は埋め戻され、住宅と国分寺公園の間の広い遊歩道となっている(写真)。途中には解説板があり、古代の人々がどのような姿でこの道を歩いたのかがわかる。北に向かって行けば、この道がはるか奈良・京都の都に通じ、南に歩けば武蔵国分寺の脇を通って武蔵府中に通じている。国分寺崖線の坂上に立てば、当時の旅人は、武蔵国分寺の大伽藍と府中の街を見下ろして、はるばる都から旅してきた感慨にふけっただろうと想像する。

新しい土地や新しく人々をつなぐのが道であり、この道はどこに通じているのだろうか想像を広げるのもまた楽しい。いつの時代も道は未知への期待と希望に満ちているとつくづく思う。(奥野英城)

万葉植物園

武蔵国分寺跡の北に位置し、国分寺市が天然記念物に指定する万葉植物園は興味深い。



ここには武蔵国分寺が栄えていた奈良時代の末期に編纂された、日本に現存する最古の和歌集“万葉集”で歌人が好んで詠んだ植物が集められています。昭和に採集され現在、

約160種に達する植物はそれぞれに和歌を添えたプレートで説明されていました。その中からキク科のうけら(和名オケラ・写真)を詠んだ一首を紹介します。

“恋しけば 袖も振らむを 武蔵野の
うけらか花の 色に出なゆめ”

意は“もし恋しくなったら袖を振って呼んでくださいれば良いのですよ。武蔵野のうけらの花のようにけっして目立たないようにね”。解釈はロマンチストの読者にお任せします。(中濱敬文)